総評〔高校生の部〕

高知工業高等専門学校講師　佐藤　元紀

二〇二〇年は「いつも」とは異なる一年となった。「いつも」が恒久的なものではないと理解しつつも、つい比較してしまう一年だった。第二十九回大原富枝賞にもそれは影を落とし、高校生の部では小説一〇点、随筆六点（計一六点）の応募となり、応募数が減少している「いつも」の四分の一程度に止まった。

近年、小説・随筆ともに厳しい結果を下さねばならない状況が続いている。それに関しては、今年も同じであった。審査をする上で毎年期待するのは、今の時代や社会に対する十代後半の書き手による「何か」である。それを生み出すきっかけが時代や社会（家族や学校などの小さな社会も含まれる）であり、それを明確にするための定規が知識や体験である。

今回の作品には、「テーマや問い」が見えないものが目立った。特に小説は、いわゆる「異世界モノ」がテンプレートのように機能し、それをフレームとして用いて書くことに縛られ過ぎているように感じられた。異世界に足を踏み入れてしまう設定は貴種流離譚の変奏として捉えられるかもしれない。しかし、ハッピーエンド・バッドエンドいずれにしても「新しい私」を発見する物語であるだけでは、書き手による「問い」が見えないまま強制終了された印象を読者は覚える。共有されたフレームを用いて書くことにより、同世代の今の読者からは「イイね」と共感を得ることができるかもしれない。しかし、一〇年後、五〇年後に、そのフレームが同じように有効に機能するとは言い難い。広く共有されたフレームを用いることがいけないのではない。作品が普遍性を持つためには、そのフレームのなかに落とし込まれた「何か」が必要となる。

たとえば、資本主義の限界による格差拡大や環境破壊、二〇二〇年に世界状況を一変させた新型コロナウィルスの猛威など、今日の社会が抱える問題は多い。これらに対して今を生きる書き手が何を思い、考えるのか。それを直接的に書くのではなく、フィクションのなかに落とし込んで表現する。「小説」として作品を残す意味はそこにあるので

はないだろうか。まずは、「何か」を捉えて向き合って欲しい。

次に、「書き方がよく分からない」という声を耳にすることが多い随筆に関して述べたい。随筆は感想文や報告書、体験記ではない。また、「ふるさとを扱ったエッセイや随筆のたぐい」（『ふるさとの丘と川』序）と大原富枝が両者を明確に使い分け、書き分けているように、随筆はエッセイとも異なる。書き手の心理や感情を書き表した内面告白がエッセイであり、書き手の知識や体験をもとに、思索・批評した「何か」が随筆である。後者は、読後の読者に思索の種を与え、更なる思考を促す。そこに「随筆」としての面白さがあり、意義があるのではなかろうか。

先にも述べたように、「何か」を明確にするためには知識や体験の蓄積が必要である。その不足が、小説では描写の薄さを招き、随筆では思索の甘さに繋がっているように思われる。自らの作品内に登場する事柄に関する文献や資料を読み込み、取材を重ねることによって全体像を捉えない限り、偏った見方をしたり、ただの空想で終わったりする。作品の厚みを増し、説得性を高めるためにも、この過程は欠くことができない。大原富枝も膨大な取材ノートを残している。創作に臨む際に、いきなり筆を執るのではなく、問いの立て方や書き方（プロットの立て方等も含む）を既存の作品――特定のジャンルや時代に偏らない――から知る機会を設けてほしい。

最後に、ただ「書く」のではなく、「何のために書くのか」を書き手ひとりひとりに明確にしてもらいたい。「書くことは生きるということ」という言葉に表れているように、大原富枝にとって「書く」ことは、自身が自身として「生きる」ことを見出す営みであった。書き手の数だけ、「書く」理由は存在する。それを明確にすることは、時代や社会に向き合って、書き手として何を問いかけるのかという大きな問題を自覚することにも繋がるはずだ。個々が世界と向き合った「何か」を残し、再生する道具が言葉である。「書く」ことに「生きる」ことが接続するのも、その点においてではないだろうか。